

ヴィルヘルム・ムーベリ『この世のときを』が映す移民が見た  
世界

スウェーデン語専攻 荒田憲助

目次

1. はじめに
  - 1.1. 『この世のときを』分析の今日的意義
  - 1.2. 論文要旨
2. 作者紹介と作品のあらすじ
  - 2.1. 作者紹介
  - 2.2. 『この世のときを』あらすじ
3. 考察
  - 3.1. 作家と主人公の関係
  - 3.2. 繰り返される「逆説的な帰結」
    - 3.2.1. リアリスティックな生き方とロマンティックな  
終わり
    - 3.2.2. 兄の人生とその死
    - 3.2.3. アイデンティティの喪失と帰属への回帰
  - 3.3. まとめ
4. おわりに

## 要約

「多様性」という言葉が声高に叫ばれるようになって久しい。LGBTQと総称される性的マイノリティの権利の保護を求める議論や、国籍あるいは肌の色による人種差別に対する抗議活動が盛んである。しかし同時に、「多様性」とは正反対の動き、すなわち「画一化」も見られる。昨今の文壇には、男性性を悪として嫌悪し、解放されるべきものであるという論調が現れた。「男らしさ」という既存のアイデンティティのひとつを消し去ろうとする動きであり、多様化に反する画一化の動きである。また、ソーシャルメディアの発達によって情報は軽々と国境を乗り越える。同時に、大量かつ真偽不明の情報は人々に分断をもたらしている。米大統領選が良い例である。ここにおいて、国家あるいは国民の連帯意識というアイデンティティのよすがが、存在感を失いつつある。こうした「多様性」というスローガンに伴う「画一化」の動き、すなわち旧来のアイデンティティの枠組みから解放されようという動きの先に、我々は何を見るのだろうか。自分が何者であるのかという問いに対する回答を探すためのよすがを手放した先に、どんな未来が待っているのだろうか。

本稿は、スウェーデン人作家 Vilhelm Moberg の小説 *Din stund på jorden* 『この世のときを』 (1963) の考察を通して、この偉大な作家の内面あるいは人類の精神を覗き込むことで、この問いに答えようとしたものである。『この世のときを』は、移民を経験した作家による、スウェーデン系アメリカ人を主人公とした作品である。生まれ育った家族も、祖国も、宗教も、愛した人と築いた家庭も捨てた人物、すなわちアイデンティティのよすがをことごとく手放した老人が主人公なのだ。彼が死を前に何を思い、何を見、何を体験するのか。その先にどんな答えを見出すのか。それを考察し、テキストに一つの解釈を与えることは、成立から 60 年を経た今日の文脈においても、あるいは今日の文脈においてこそ、大きな意義があろう。

以上を第一章で述べたうえで、第二章では事前知識として作家の人生および作品のあらすじを紹介した。

第三章では考察として、ふたつの段階を踏んだ。まず主人公と作家の関係を整理し、この二人の目線には重なる部分が

多く、作家が移民として、どのように世界を知覚し、思考したのかが色濃く出ている作品であることを指摘した。そのうえで、彼（作家あるいは主人公）の思考を追うために、作品内に頻出する「逆説的な帰結」という構造に着目し、論を進めた。ここでいう「逆説的な帰結」とは、上で述べた「多様性」に伴う「画一化」と同様に、ある方向への動きや思考が、正反対の結果として現れるという構造である。以下がその一例である。作中、主人公は、祖国を捨てて自身のアイデンティティを放棄した。しかし同時に、逆説的ではあるが、自分の本質に引き戻されていく。帰属の拒否という選択は、長い人生の末に、死を前にした主人公に帰属への回帰を強いたのである。こうした過程を観察することを通して、作家が見た世界、および人間の内部に迫ろうと試み、ひとつの結論を出した。人間とはそもそもなにかとなにかの隙間に行くような存在であると著者は考えたのではなかろうか。異なる方向へのベクトルに引っ張られ、常に矛盾を孕むような。

主人公が祖国の地で親しむ植物は、杜松の木である。トゲを持ち、苦いビールにしかならない杜松の木は、主人公の肌を刺しつつも懐かしみを感じさせるものとして描かれる。主人公がかつて手放し、老いて求めたつながら、すなわち帰属先も、これと同じではなかったか。自分のアイデンティティを決めつける外的な要因は、決してオレンジのように甘く香り高いものではない。むしろ、無数のトゲで人間を傷つけることがある。それでも、安息と温もりを与えてくれる存在であることもまた確かでもあった。第三章では、以上のような例を通じて、我々は、痛みと安息のように一見相反する感覚を同時に持ち得ることを指摘した。

最後に第四章で、第三章で得た結論を今日の社会に敷衍した。冒頭で指摘した「多様性」にともなう「画一性」は、ふたつの異なる動きなのではなくひとつの動きであるのかもしれない。「多様性」という標語によって帰属意識が薄れれば、それぞれの人間の背後にある差異の存在感も同時に薄まり得るからである。そして、「多様性」への道が、主人公が歩んだ人生のように、逆説的にアイデンティティ拡散の危険を孕んでいることを指摘して冒頭の問いに対する答えとした。終わりに、この先に待つ危機を乗り越えるために、たとえ痛みを伴ったとしても、帰属意識の伴った多様性を実現す

べきと結んだ。